

## 「古典文学にみる伊香保」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

### 1. 上野国東歌（『万葉集』巻一四）

- ① 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）
- ② **上毛野**伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）
- ③ 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）
- ④ 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら（三四〇九）
- ⑤ 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の躰ろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）
- ⑥ 伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し善かば（三四一〇）
- ⑦ 伊香保ろの岨の榛原吾が衣に着きよらしもよひたへと思へば（三四三五）
- ⑧ **上毛野**伊香保の沼に植多小水葱かく恋ひむとや種求めむ（三四一五）
- ⑨ 伊香保せよ奈可中次下思ひどろ隈こそしつと忘れせなふも（三四一九）

### 2. 「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか（厳）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。
- ・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、檜の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は檜の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか（厳）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典基礎語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（厳し）」「いかめし（厳めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか（厳）」は、この山のもつどのような性格を「いか（厳）」ととらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

★「伊香保」をアイヌ語のイカポップ《熱くたぎる湯》から来ているとするのは不可。

3. 『延喜式』神名帳の上野国の条(そのうち一部)

上野国十二座 大三座  
小九座

……

甘楽郡二座 大一座  
小一座

貫前神社 大神 宇藝神社

群馬郡三座 大一座  
小二座

伊加保神社 大神 榛名神社 甲波宿祢神社

勢多郡一座 大

赤城神社 大神

……

4. 中古中世の和歌から

① くれ竹の 世世のふること なかりせば いかほのぬまの いかにして 思ふ心を  
のばへまし…… (『古今集』一〇〇三) 壬生忠岑

② いかほのやいかほのぬまの いかにして 恋しき人を今ひとめみむ (『拾遺集』八五九)

③ かくれなくあはずなりなばみちのくのいかほのぬまの われいかにせん (『古今和歌六帖』一六八五)

④ かんつけのいかほのぬまにうゑしな ぎかくこひんと やたねもまきけん (『古今和歌六帖』三八六七)

⑤ そこふかきいかほのぬまのいかほどに恋しきことをおもふと かしる (『新撰和歌六帖』一〇四六)

⑥ わが身いまなほもかしらにかみつけの いかほのぬまの いかがかなしき (『新撰和歌六帖』一〇四九)

\*以下、「建保三年名所百首御歌」から \*建保三年は、一二一五年

伊香保沼 上野国

⑦ まこもおふる いかほのぬまの いかばかり波こえぬらん五月雨の比 (二八九) 順徳院

⑧ こなぎうゑしいかほの沼のあやめ草ながき程をば誰もとめけん (二九〇) 僧正行意

⑨ 五月雨に いかほの沼のあやめ草けふはいつかと誰かひくらん (二九五) 家隆

5. 『神道集』(延文三年(一三五八)頃の成立か)

実に山神達の仕業なれば、大石共を取り重ねたる有様に、只の山には似ざりけり。此の山は山神達の大石を重ねて、楼と造れる山なれば、石楼山とも云ふなり。此の山の北

麓に北の谷沢とて極めて爪痛き水の流れけるが、此の石楼山の出来て後は、極めて熱き湯と成りて流れければ、見る人此を涌の巔とは申すなり。……又伝へ聞くに、不思議の事あり。赤城の沼の龍神に唵佐羅摩女と、伊香保の沼の龍神唵摩羅摩女と沼を諍ひし時に、西より毛垣を取りて河より東へ枳げ、東より軽石を以て河より西へ投げし昔より、群馬の郡渋河の保の郷の戸の村に、衆生利益の爲にとて、療治の御湯を出だされたりけるが、大宝元年辛丑二月十八日に、水沢寺を差出山の麓に立てられし時、番匠共が妻子等が安も無く衣装を洗ひける。一人の老女来て、衆生利益の爲に出だされたる御湯にして、汚らはしき物を洗ひそそく間、此の湯をば今少し山深く運ばんとて、瓶に入れつつ頂きて、弥陀が峯を超ゆると、僧正の夢に御覽じて、打ち驚き給ひて後、人を下して見せ給へば、現に夜の間に失せて無かりけり。僧正は夢路に任せて尋ね尋ね見て、慥かに弥陀が峯を超ゆると見たりつるとて、奥深き山を見せ給へば、件の郷戸の御湯は、石楼山の北の麓、北谷の沢の東窪大崩れが谷より、里湯が本の伊香保の湯に出合ひけるも不思議なり。抑も伊香保の大明神とは、男体・女体御在す。男体は伊香保の御湯を守護して、湯前にて御在す時は本地薬師なり。女体は里へ下らせ給ふとて、三宮渋河保に立たせ御在す、本地は十一面なり。（卷七 四十二 上野国第三宮伊香保大明神事）

6. 堯恵『北国紀行』（文明十八年（一四八六）の紀行）

是より棧路をつたひて、草津の温泉に二七日計入て、詞もつゞかぬ愚作などし、鎮守の明神に奉りし。又山中をへていかほの出湯にうつりぬ。雲をふむかとおぼゆる所より浅間嶽の雪いたゞき白くつもり初て、それよりしもは霞のうすくにほへるがごとし。

なかはよりにほふかうへの初雪をあさまの嶽の麓にそみる

一七日いかほに侍りしに、出湯の上なる千巖の道をはるばるとよち上りて大なる原あり。其一かたにそびえたる高峯あり。ぬのたけといふ。麓に流水あり。是をいかほのぬまといへり。いかにしてと侍る往躅をたつねてわけのぼるに、「からころもかくるいかほの沼水にけふは玉ぬくあやめをそひく」と侍りし京極黄門の風姿まことに妙なり。枯たるあやめのね霜を帯たるに、まじれる杜若のくきなどまで、むかしむつまじくおぼえて、

種しあらはいかほの沼の杜若かけし衣のゆかりともなれ

7. 宗長『宗祇終焉記』（文龜二年（一五〇二））

信濃路にかゝり、ちくま河の石ふみわたり、菅のあら野をしのぎて、廿六日といふに草津といふ所につきぬ。おなじき国に伊香ほといふ名所の湯あり。中風のためによしなど聞て、宗祇はそなたにおもむきて二かたになりぬ。此湯にてわづらひそめて、湯におるゝ事もなくて、五月のみじか夜をしもあかしわびぬるにや。

いかにせむ夕告鳥のしたりおに声恨むよの老のねさめを



8. 伊香保の万葉歌碑（旧伊香保町（現在は渋川市に含まれる）が昭和五十七年に建てたもので、揮毫は伊勢崎市出身の佐々木心華氏）

